

感想文部門 銀賞

「子どもの心を育てるとは」(佐藤聖子・瑞穂市)

[おすすめしたい本:城戸真亜子『子どもはアーティスト』(学研教育出版)]

「さて、困った。」私は絵を描くのが苦手だ。一歳の娘と絵を描こうと思ったが、白紙を前に何をどう描けばいいのかわからない。

そんな時、この本と出合った。偶然にも、娘が図書館の本棚から引っ張り出してきてくれた。子どもが描いた真っ黒な機関車が表紙だ。こういう絵を見せたら楽しいかと思い、軽い気持ちで借りたのだが、子どもの作品を見る目を変えるきっかけの一冊となった。

この本は、アートスクールを主宰されている城戸真亜子さんが「アートの力を子育てのなかでもっと活用できないだろうか?」という思いで書かれたものだ。どうしたら絵がうまくなるかという観点ではなく、創作活動を通じて子どもの心理をわかりやすく書いた本だ。

子どもたちの実際の作品も載っている。それらがどういいのか最初はわからなかったが、各章のエピソードを読み、アートとは実にストーリー性のある奥深いものだと思った。先生が与えるテーマについて、子どもたちがどう反応し、何を感じ、作品をどのように完成させていったのか、その工程を読むと読み手の私までなんだかワクワクし、実にさまざまな作品たちに自然と愛着がわいた。

私が小学生のころの話だ。スケッチの授業で高く評価されたのは、画面いっぱいに広がる大きな鶏と小さな男の子が描かれた絵だった。人間よりも大きな鶏に私はどうも腑に落ちなかった記憶だけが残っている。

著者によれば、創作活動を通して子どもたちは、多様性を尊重する豊かな感性、優しさ、思いやりを身につけているという。

創作活動というと、個々の感性や技術を磨く排他的で孤独なイメージだったが、自分とは違う他者を認める広い心をはぐくむ場なのだ初めて知った。それと同時に、私はなんと狭い目で人の絵を見てきたのかと恥ずかしくなった。

それだけではない。作品完成までには、「集中力」と「根気」、どう表現するかという「思考力」、一つの表現方法を選びとる「判断力」、そして思うように進まない状況をそのつど自分の力で解決していく「問題解決力」が必要だ。創作に没頭している本人たちは、そんなややこしいことは考えてもいないだろうが、創作活動一つに心を豊かにするためのステップがいくつもあることに驚きだった。

では私たち大人に何ができるのか?

「小さなフックをかけてみるだけ。あとは、子どもたちが自分の力でそのフックをつかまえ、乗り越えていく」とある。なんとたくましいことだろう。ゴールはきっと子ども自身が既に見据えていて、そこに向かっていく力は私たちの想像よりもずっと強い。きっかけを与えた後は、子どもたちに必要な「自分のことをいつも見ている認めてくれる存在」に徹するだけでいい。

それはアートに限らず、子どもが取り組もうとする全てのことに言えるだろう。遅く、自由に、そして柔軟に伸びてゆく子的心を見守りながら、私なりに精いっぱい「小さなフック」を見つけていきたい。